

[分類]	普及技術
[成果名]	ハクサイ黒斑病防除にプロポーズ顆粒水和剤が有効である
[要約]	ハクサイ黒斑病防除にプロポーズ顆粒水和剤の1,000倍液を散布する。
[担当]	野菜花き試験場佐久支場
[部会]	病虫部会

1 背景・ねらい

ハクサイ黒斑病は生産現場で常発する重要病害である。本病を防除するため効果の高い薬剤を選定するとともに、ハクサイに対する薬害の有無を検討する。試験は平成14年および16年に実施し、平成20年に農薬登録されたため、今回普及技術とした。

2 成果の内容・特徴

(1) ハクサイ黒斑病の防除に、プロポーズ顆粒水和剤の1,000倍液を散布する。

農薬登録内容

プロポーズ顆粒水和剤

[一般名及び成分含有量] ベンチアバリカルブイソプロピル：5.0% TPN：50.0%

[毒性] 人畜毒性：普通物 [魚毒性] C類相当

[対象作物に対する適用登録状況（平成20年9月16日現在JPP ネット確認）]

作物名	適用病害名	希釈倍数	散布液量	使用時期	使用回数	使用方法	ベンチアバリカルブイソプロピルを含む農薬の総使用回数	TPNを含む農薬の総使用回数
ハクサイ	べと病 白さび病 黒斑病	1,000	100～ 300 L /10a	収穫7 日前ま で	2回以 内	散布	3回以内	3回以内(は種又は定植前の土壌混和は1回以内、散布は2回以内)

(農薬における注意事項)

- ・試験における農薬の処理回数と適用登録の内容が異なるので注意する。

3 利用上の留意点

(1) 本剤は、新しい作用を有する新規の殺菌成分と既知TPNとの混合剤であるが、耐性菌の出現を防ぐため、なるべく連用を避け、作用機作の異なる薬剤とのローテーション散布を心がける。

(2) 水産動物に強い影響を及ぼすので河川・湖沼および養殖池に飛散、流入するおそれのある所では使用しない。

4 対象範囲

県下全域

5 具体的データ

(1) プロポーズ顆粒水和剤のハクサイ黒斑病に対する防除効果について、平成14年および平成16年に佐久支場内ほ場において試験を実施した。

ア 平成14年は少発生条件下での試験となった。プロポーズ顆粒水和剤の1,000倍液は、対照薬剤のダコニール1000と比較して優る高い防除効果が認められた。薬害は認められなかった(表1)。

表1 プロポーズ顆粒水和剤のハクサイ黒斑病に対する防除効果（平成14年、佐久支場）

供試薬剤	希積 倍数	調 査 株 数	発病株 率(%)	発病度	防除価	薬害
プロポーズ顆粒水和剤	1000	20.0	5.0	1.7	93.6	なし
ダコニール1000	1000	20.0	23.3	7.8	70.8	なし
無処理	—	21.0	64.3	26.7		

値は3反復の平均値

試験場所：小諸市山浦 場内2号圃場 発生状況：少発生 品種：優黄

定植：8月5日 栽植距離：畦幅55cm、株間45cm 区制・面積：1区10.4㎡ 42株/区 3連制

処理方法：平成14年9月10日（結球開始前）、17日、18日、24日および10月2日の5回、所定量の薬液（Sハッテンの10,000倍加用）を背負式動力噴霧器を用いて10aあたり300リットル散布した。9月17日は散布途中から30.5mmの降雨があり、そのまま全区処理を実施したが、翌日に再散布した。その他4回の処理時は降雨の影響はなかった。

調査方法：10月8日（最終散布6日後、収穫期）に、各区19～24株について発病の有無および発病程度を調査した。薬害は肉眼観察によった。

発病指数 0：発病を認めない

1：1枚の外葉に発病

2：外葉の2枚以上に発病

3：外葉だけでなく結球葉にまで発病する

発病度 = $(\sum (\text{発病指数} \times \text{株数}) / (\text{調査株数} \times 3)) \times 100$

防除価 = $100 - ((\text{処理区発病度} / \text{無処理区発病度}) \times 100)$

(2) 平成16年は試験開始時に既に発生が認められ、収穫期の被害調査時には多発生となった。プロポーズ顆粒水和剤1,000倍液散布は、対照薬剤のダコニール1000と比較して優る防除効果であったがその程度は低かった。薬害は認められなかった（表2）。

表2 プロポーズ顆粒水和剤のハクサイ黒斑病に対する防除効果（平成16年、佐久支場）

供試薬剤	希積 倍数	調 査 株 数	発病株 率(%)	発病度	防除価	薬害
プロポーズ顆粒水和剤	1000	32.0	96.8	42.4	38.6	なし
ダコニール1000	1000	34.0	100	56.7	17.8	なし
無処理	—	34.0	100	69.0		

値は3反復の平均値

試験場所：小諸市山浦 場内1号圃場 発生状況：多発生 品種：優黄

定植：8月20日 栽植距離：畦幅50cm、株間45cm 区制・面積：1区14.9㎡ 66株/区 3連制

処理方法：平成16年9月17日（結球開始前）、24日、10月1日および8日の4回、所定量の薬液（Sハッテンの10,000倍加用）を背負式動力噴霧器を用いて10aあたり250リットル散布した。

調査方法：10月15日（最終散布7日後、収穫期）に、各区30～36株について発病の有無および発病程度を調査した。薬害は肉眼観察によった。

発病指数 0：発病を認めない

1：1枚の外葉に発病

2：外葉の2枚以上に発病

3：外葉だけでなく結球葉にまで発病する

発病度 = $(\sum (\text{発病指数} \times \text{株数}) / (\text{調査株数} \times 3)) \times 100$

防除価 = $100 - ((\text{処理区発病度} / \text{無処理区発病度}) \times 100)$

6 特記事項

[公開] 制限なし

[課題名、研究期間、予算区分]

東信地域の作物に対する病害虫防除試験、平成14年、16年（2002年、2004年）、県単素材開発